

ふるさとの味をつくる

—株式会社桔梗屋—

職場 ルポ

EMPLOYER REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



株式会社桔梗屋

〒405-0077 山梨県笛吹市一宮町坪井1928

TEL 0553-47-3700 FAX 0553-47-3706

URL 桔梗信玄餅.com <http://www.kikyoushingenmochi.com/>

桔梗屋ホームページ <http://www.kikyouya.co.jp/>

山梨みやげNo.1

山梨の歴史上の人物といえば、武田信玄。山梨の代表的なおみやげとして知られる「桔梗信玄餅」。一つずつ風呂敷に包まれた、きな粉餅に黒蜜をかけるお菓子は、明治二二年（一八八九年）に甲府市内で創業した株式会社桔梗屋が販売している。

桔梗屋は和菓子屋として、「きんつば」を中心にお菓子を作り続けてきた。昭和三〇年代半ば、洋菓子の人気の高まりに危機感を抱いた前社長は新しいお菓子の開発に取り組み、桔梗信玄餅を生み出した。

桃源郷として知られる一宮町の本社・工場で、執行役員・総務部長の石川一さんにお話をうかがった。



執行役員 石川総務部長

「山梨には、昔から八月のお盆の時期に、餅にきな粉と黒蜜をかけた安倍川餅を供えて食べるという風習があります。この餅をヒントに、一年中おいしく食べられないかをつくったのが桔梗信玄餅です。当時、風呂敷に包むという形は斬新



山梨の代表的なおみやげ「桔梗信玄餅」

るとたちまちヒットし、さらに大河ドラマに上杉謙信と武田信玄が取り上げられたこともあり、素朴な味わいの桔梗信玄餅は飛ぶように売れ、一九七七年に「全国菓子大博覧会」の名誉総裁賞を受賞、二〇〇三年には山梨みやげ売り上げ一位になった。この間に会社も大きく発展し、一九九〇年に現在地に移転した。

「今日では県内で二九の直営店を展開して、おみやげとともにご家族で食べていただける和菓子をつくっています。売上げの半分以上は桔梗信玄餅が占めています」

最近では日本を代表するおみやげとして、成田空港でも販売されている。

で、わざわざ包装を解いて別容器の黒蜜をかけるものが売れるわけではないという声もありましたが、発売後はユニークな包装も話題となり、ほめて食べるという『あそび心』がお客様から好評でした。一九六八年（昭和四三年）に発売され

「二つのステータスとしてうれしいですね。都内を中心としたデパートの全国銘菓コーナーにはおいていますが、全国への出荷は極力抑えて、山梨でお求めいただけるおみやげとして県内で販売しています。お客様への私どものテーマは、おいしさ・楽しさ・美しさ、そして健康へのこだわりです。桔梗信玄餅は楽しさの原点になっていますが、ものを作ることへのこだわり、販売するときのこだわりを持ち続けていきたいと思っています」

仕事に慣れたら ステップアップを

従業員は、桔梗屋グループで約五〇〇人、本社・工場に三二〇人。現在、身体障害者三人、知的障害者二人、精神障害者一人が働いている。

「私がかかわった一四、五年前にはすでに身体に障害がある人たちが働いていましたが、障害者の雇用を意識し始めたのは一〇年ほど前からです。会社には、障害があってもできる作業はいろいろあると思います」

見学通路からガラス越しに一階の工場を見下ろすと、大勢の従業員が製造ライ



下肢に障害をもつ雨宮洋子さんは、入社して二六年になるベテラン

ンに乗って流れてくる桔梗信玄餅を一つずつ風呂敷に包み、箱詰めをしている。その中に、養護学校を卒業後、一年間の職場適応訓練を経て二〇〇〇年に入社した早川亜希あきさんがいる。

「箱に詰めやすいように六個ずつまとめる作業などをしていきますが、最初はよく『お腹が痛い』と



できあがった桔梗信玄餅の箱詰め作業をする早川亜希さん

でした。本人に直接確認できなくて、車で送り迎えしているお母さんと話をしました。続かないかもしれないと思っ

ていましたが、がんばっていますね」
見学通路から見ると、早川さんに障害があるとはわからない。

「本人に取材があることの確認をしたから、自分でお母さんに伝えると答えてく

れました。お母さんからは、仕事を提供していることに対してお礼を言われ

「二年間の研修期間中、帰りたいと急に言い出さないと心配でしたが、そういうことは一度もなく、彼の存在が頭の中から消えてしまいくらいでした。たまたま私と同じ町の出身だとわかり、お昼は私の横に座って食べています。仕事ができるようになれば、次の仕事を考えた

その日は、店頭に並べる桔梗信玄餅の見本に楊枝を接着する作業をしていた。のりがたくさん出たりして、なかなかむずかしそうだ。

「ぼくがやっているのは、ここに楊枝をさすことです。向きを間違えたいへんです」

「のりを大量につけすぎたかな？ 楊枝をつけるのはあまり得意ではないです。いつもしている仕事と違います……」

明るく、質問にもよく答えてくれる。いまの作業ができるようになったら、どのような仕事に向いているのか。山梨障害者職業センターの障害者職業カウンセラー、田村みつよさんは今後に思いをほせる。

「センターは、代永さんの養護学校時代にかかりました。入社してまだ間がないですが、仕事に慣れてきています。本人は何かを要求しているかもしれませんので、次のステップをどうするかを、私たちとしても考えていかなければならないと思います」

精神障害をオープンにして 体験談も発表

桔梗屋では、精神障害がある平塚佳樹さんが昨年七月から働いている。精神障害者も雇用率へ算入することが検討されているが、企業で働き、しかも本人が取

材に応じてくれるというケースはまだ本当にまれなことだ。採用に当たって、石川さんに不安はなかったのだろうか。

「入社するまでに心配するようなことはありませんでした。ご本人に会ったとき、無理をさせなければまったく問題はないだろうと思いました。無理がないような一定のローテーションの中でまもなく一年になりますが、何も問題は起きていません」

平塚さんはこれまでも企業に就労していたが、働き続けることができなかった。今回は、統合失調症の人たちのための職業準備支援事業の自立支援コースでトレーニングを積んだ。障害者職業カウンセラーの田村さんがかかわった。



桔梗信玄餅の見本づくりをする代永書さん

「いままでは病気をクローズにして再発していましたが、今回はオープンにしています。がんばりすぎると再発の可能性があるとご本人も納得されたので、面接のときは自らの状態を話しています。疲れや精神的なストレスがたまらないように、最初は働く時間を短めにしましたが、もう少し長くしたいという本人からの希望で延ばしました。まわりで見てくださっている方もいますので、センターに困ったという相談は一回もありません」

平塚さんは、山梨県内の医療や保健、関係機関が集まったフォーラムの席上で、当事者代表として体験談も発表している。

「平塚さんは医療機関とのかかわりを持ちながら、企業人としてがんばっているといます。企業の雇用管理だけでは病気の部分は重たいと思います。本人は仕事に入ったからにはがんばらなくてはという気持ちがありますし、医療機関では仕事が忙しくないかと心配されますので、医療機関と企業を中継する形でジョブコーチが現場に入

山梨障害者職業センター

〒400-0864 山梨県甲府市湯田2-17-14
TEL 055-232-7069 FAX 055-232-7077

職場 ルポ

つてみています」
担当のジョブコーチは長田正人さんながたまさひとだ。

「無理をしすぎると続かなくなるので、無理をしすぎないように、本人の気持ちの持ち方を折に触れて話をしています。平塚さんをサポートしてくれる方が要所において、助けられた部分も大きかったと思います」

石川さんは配置にあたり、職場の人たちを集めて、平塚さんの障害を説明することはしなかった。

「勤めた経験もありますし、無理さえしなければ健常者と変わらないという結論を出したので、現場の責任者には話しましたが、あえて我々のほうからうまくやってくださいと言わないほうがいいと思います。あいさつはきちんとしていますし、内線電話には平塚さんが出てきますが、しっかり対応してくれます」

平塚さんの職場は商品センターで、最初はダンボールの整理など、いまはアウトレット用の品出しの作業をしている。たとえば桔梗信玄餅の賞味期限は製造後一二日で、残り五日になると店頭から回収されてくる。まだ十分おいしく食べられるお菓子は、工場アウトレットで販売しているのだ。平塚さんが「こんにちは」と迎えてくれる。

「アウトレットで販売するために、風呂敷の一部をカットしています。むずか

しくありませんから、仕事には慣れました。ずっとこの仕事を続けたいですね」

甘いものは好きだが、ダイエット中がまんしているとか。自宅から車で通勤し、休日には仲間とソフトバレーを楽しむ。定時の九時から夕方五時まで働き、ときどき一時間の残業もこなす。

「母親の年代の近所の人たちがまわりで働いていますから、気を使わないですむのではないかと思いますが、健常者と変わりませんね。いままでの職歴をみますと、一、二年で仕事を変えてきていますので、過信しすぎないで、本人の状況をまわりで見えていって、何かサインが出たら、できるだけ早く気づいていきたいと思っています」と石川さん。

「この仕事ができたら、次の仕事へと考えますが、平塚さんはあまり変化を望まれないかもしれないですね。仕事ができているから次へといわれること自体がストレスになるかもしれない」と田村さん。山梨県は、精神障害者の就職率が全国で高いほうだという。

「懐の深い県民性があると思います。ですから、受け入れていただきやすい企業風土がありますね。最初は不安だと思えますが、一回引き受けていただくと親



本社工場の製造ライン

いつか、責任のある仕事を 任せられれば

身になっていただいています。こちらの会社は、受け入れ態勢の温かさと言いますか、ざつくばらんにお話しても、ごく当たり前に引き受けて下さっています」

本社・工場に隣接して、直販店、お菓

子の美術館、食事・甘味処、工場アウトレットがある。満開のばらの花がみごとだ。

「家族的な形でお菓子を作り始め、今日のような規模になったのはここ一〇年ぐらいです。前社長は自分で面接をして、全員の顔と名前を覚えていましたし、時間があれば現場をまわって、従業員の顔色を見ていました。そういう社風がまだ残っていますね。障害者の雇用に関して、



(右)平塚さんの仕事ぶりを見守る上司の伊藤哲夫さん(写真右)。平塚さんは、返品された商品処理をしている
(下)平塚佳樹さんの指導にあたった長田正人さん(山梨障害者職業センター・ジヨブコーチ)に近況を報告する平塚さん(写真右)

私のところに伝わってくる問題がないのは、よしとしていいかと思っています」

工場のアウトレットは、「包装に失敗した」などの理由で規格外になったものを従業員向けに販売していた。

「一般のお客様からも、解放して欲しいという声が十数年前からありましたので、無駄を出さない努力をしようと、工場アウトレットをつくりました。環境保全にも積極的に取り組んで、お菓子の残ったものを分別して堆肥をつくっています。甘味処の前庭に流れる小川の滝の清流は、きれいにした工場排水です」

アウトレットでは、地元の野菜を売る場所も提供している。観光バスが立ち寄ることも多く、土日は一般客に従業員駐



車場を開放する。車で五分ほどのところに、県立博物館がまもなくオープン予定だ。

「そのための営業はしていませんが、六月は観光客のピークです。昔は、お菓子をつくって売るといって考え方でした。いまはお菓子にこだわるのではなく、サービスを提供する企業と考えています。一つのことにはこだわると取り残されてしまいますから、時代に合わせて変えています。一つの店舗の中で複合店化を図り、お菓子を中心に花、お茶、飲食なども含めたサービスをしていきたいと思っています」

障害者の雇用も前向きに取り組んでいきたいと考えている。

「将来の夢として、リーダー的な人が出てきて、障害のある人たちで一つの仕事を任せられるような職場ができればという希望をもっています」

山梨みやげNo.1の売り上げを誇る桔梗信玄餅。その人気とのれんに安住せず、企業として「常に新しい視点、切り口を持ち続ける」という心意気が伝わってきた。